

# 大阪大学退職に際して想ったこと

## - Doctor of Philosophy と大学教育



随 筆

原 島 俊\*

What I thought on the occasion of retirement from Osaka University

Key Words : Doctor of Philosophy, a purpose in life, human consciousness  
liberal arts education, occupational education

## はじめに

阪大を定年退職して、早いもので、もう5年が過ぎようとしています。熊本の崇城大学（旧熊本工業大学）という中規模の私立大学で引き続き教鞭を取っています。所属する学部は生物生命学部、学科は応用微生物工学科と言う名称の学科で、50年ほど前に、阪大工学部の醗酵工学科（現在の学科で言えば、応用自然科学科応用生物工学コースでしょうか）と九大農学部農芸化学科の先生方が設立した学科です。ちなみに、「応用微生物工学科」という名称の学科は、我が国でひとつしかありません。そうした縁から、これまでに、教室の先輩や後輩が8名ほど教授をしておりました。私が赴任したときにも3名の後輩が教授をしておりましたが、昨年までに全員定年退職し、現在、阪大出身者は私ひとりになってしまいました。以前から勤めていた教員の定年は65歳ですが、外部から加わった教員の定年は68歳ないし70歳という事情によります。

研究室は、「応用微生物学研究室」という名前で、昨年教授になられた九大発酵学教室出身の若き俊秀、浴野圭輔先生と2人で運営しています。毎年10名から14名の卒研生が配属されますが、ほとんど大学院には進学しませんので、阪大の研究室のように学生さんが毎年何十名もいるという規模ではありません。しかし、助教の先生がおられないこと、従っ



応用微生物学研究室の学生さんたちと  
(最後列左から3番目が原島、その右が浴野先生)

て細かいことまで学生さんを直接指導する必要があること、私自身も実験をしていることもあり、私が何十年か前に助手であったときのような状況で、毎日卒論指導にかなりの忙しい時間を過ごさせていただいています。研究については、幸い5年間に渡り、2つの科研費やNEDOプロジェクトによる助成を受け、前述の浴野先生、学部学生、崇城大学初の2名の国費博士課程留学生（ハングラデシュ）、1名の博士研究員の方々の協力を得て、阪大にありました時と同様に進めることができている。研究費助成については、私のような年寄りではなく、もっと若い方を支援すべきであるという声も聞こえてきそうですが大変有り難く、大切にに使わせていただいています。



\* Satoshi HARASHIMA

1949年生まれ  
大阪大学大学院 工学研究科 博士課程  
醗酵工学専攻修了 (1977年) (学部1972年卒)  
現在、崇城大学生物生命学部 教授、  
大阪大学名誉教授 工学博士 酵母遺伝学・分子生物学  
TEL : 090-6825-7509  
E-mail : harashima@bio.sojo-u.ac.jp

## 阪大退職に際して意識に登ってきたこと

私は18歳で阪大に入学したとき以来、アメリカの国立保健衛生研究所（National Institutes of Health : NIH）に留学した2年間（1984年から1986年）を除き、47年間、幸か不幸か、ずっと同じ阪大にお世話になっておりました。従って、大きく環境が変

わるという経験をしたことは米国留学の時しかありませんでした。今回、阪大を定年退職し、熊本の私立大学に奉職することになり、大きく環境が変わるといふ2回目の経験をしました。アメリカに留学したときには、それほど環境が変わったという実感はなかったのですが、それは若かったせいかもしれません。しかし、今回は意識が大きく変わったことに気がつきました。その理由は、おそらく物理的な環境が変わったということではなく、年齢、あるいは阪大の退職ということが大きく関係しているように思います。

哲学が教えるところによれば、人間が毎日生きていく上で持つ「意識」には3つの種類があるようです。そのうちの1番目は「日常生活」における意識、そして2番目は「職業生活」における意識です。この2つの意識は誰にも馴染み深いものです。その理由は、私達の生活の多くが、この「日常生活」や「職業生活」の意識のもとで流れていくからです。振り返ってみれば、私自身も、恥かしながらこれまでそのような意識のもとでしか生きてこなかったように思います。しかし、人間が生きていくには、あるいは人間が成熟するためには、この2つの意識だけでは不十分で、それに加えて第三の意識と言われるものが重要ではないかと言われています。

### 第三の意識とは何か

それでは第三の意識とは何か。それは、「人間としての意識」とでも呼ばれるもののようです。「人間としての意識」とは何か。それは日常生活で起こってくることに対応する意識や、職業生活をしていく上での意識とは全く違う意識であり、日常生活や職業生活を離れて「人間存在そのものを想う意識」です。もっとわかりやすく言えば、「ひとは何のために生きるか」ということを想う意識と言ってよいかもしれません。日常生活は、おそらく思索がほとんど行われな生活であり、もちろん、家族との関わりなど、日常生活に伴って起こってくる「判断」のようなものは常に必要ですが、それは多くの場合「思索」と言えるようなものではありません。また、職業生活における意識は、職業を遂行するために持つ言わば目的達成型の意識であり、これも明らかにものを想う意識ではないと思います。すなわち、職業生活や日常生活の意識の層で行われる思考や議論

は、「ひとは何のために生きるか」を考える全人間的な思考が動員される意識ではありません。理想的には、日常生活の中で、あるいは職業生活の中で、第三の意識の層を持つことができればよいのかもしれませんが、少なくとも私の場合には、とてもそうした余裕はありませんでした。特に、職業生活に入ってから、職業にまつわる問題を処理することに精一杯で、そうしたことを考える余裕がなかったと言うことかもしれません。阪大を退職したとき、日常生活や職業生活の意識とは違う第三の意識を持っていない自分自身に、今更ながら気付かされたというわけです。

定年退職をして職業生活が終わると、第二の就職をして職業生活の延長をある期間続ける場合もあるかと思いますが、そこでキッパリと職業生活を止めてしまうというオプションもあります。私の大学の同級生の約半数は前者、残りの半数が後者です。私は前者の部類ですので、まだフルタイムで、阪大で職業生活を送っていたときと同じような職業生活を続けています。しかし、それはいつかは終わりが来るものであるということを、阪大を定年退職したときに意識をし始めました。そしてそのことについて漠然とした不安を感じるような精神状態になったということだと思います。

誤解のないように申し上げたいことは、決して現在の生活に不満があるわけではありませんし、現在の職業生活を、阪大にいたときに比べて軽んじているわけではありません。例えば、教育という観点からは、むしろ、阪大にいた時よりも多くの時間を使っていると言ってもいいくらいです。しかし、それでも、熊本に移って環境が大きく変わったときに、現在とこれからの生活について漠然とした不安を感じるような意識が芽生えてきたと言えば大袈裟でしょうか。

繰り返しになりますが、「第三の意識」、「人間としての意識」、この意識の層に入るためには、努めて日常生活や職業生活を離れてものを想う状態にならなければならないということに今更ながら気がついたということです。本誌の読者には多くの先輩方がいらっしやると想像しますので、70歳になったばかりの者が、今更何を言っているか、あるいは70歳にならなければ、そんなことにも気がつかなかったのかと呆れられそうですが、70歳を過ぎて

ようやく上記のようなことを「実感」してきたというのが正直なところだ。職業生活に忙しく、目の前の問題を解決しなければならないという脅迫観念にばかり囚われていた人生しか送って来なかったのではないかと、という後悔にも似た念が沸き起こってきたというやはり大袈裟でしょうか。「そもそも自分は何のために生きてきたのだろう」、「何のために生きているのだろう」という、一見素朴ですが、重要な問いを、やっとこの年になって真面目に考えなければならないということに気がついたというわけだ。世界にはその日の生活にも困る人々がたくさんいるのに、そうしたことを考えること自体、贅沢極まりないというご指摘も受けそうですが――。

### Doctor of Philosophy

博士号は、Doctor of Philosophy (Ph.D. 哲学博士) と言われることは、学位を取得した人であれば誰もがご存知ですが、理学博士や工学博士の学位を取得した人が何故、Doctor of Philosophy と言われるかは、学問の起源と関係があると言われています。学問は先ず哲学より起こり、物理学、数学、化学・・・と発展してきました。哲学者プラトンは紀元前427年、すなわち今から2500年も前に生まれましたが、その大部の著書「国家」には既に、哲学、数学、幾何学などの記述があるようです。哲学者が同時に物理学者でもあったりすることは古来より珍しくもなかったものと想像できます。先ず生きることを始めとするあらゆる事象と対峙する哲学が在り、物理学、数学・・・と学問の裾野が広がってきたわけですが、学理は哲学を起点とし、哲学に収束する、すなわち博士は全て Doctor of Philosophy に修まると云うところでしょうか。しかし、ヨーロッパでは、農学部・工学部など、新しい学問（職業）分野では長らく学位授与が認められなかったとも聞いています。それは、おそらく、農学や工学などの学問が、人間の生きる意味、すなわち「ひとは何のために生きるか」、を追求することを目的としているのではなく、職業上の目的を達成するための学問であると考えられたためだと思います。少々話がそれますが、近年、法務大学院など専門職大学院が設置されました。卒業すれば法務博士（専門職）という学位が与えられますが、通常の修士や博士の学位とは別系統であり、一般的には修士号に相当するもの

と位置付けられています。ちなみに、法務博士の英語名称は、J.D. (Juris Doctor) で、Ph.D. ではありません。

話をもとに戻しますと、結局、職業生活の終盤が見えてきたときに、「人は何のために生きるか」という問いを意識し始めたという、誠にお恥ずかしい話になってしまいそうですが、しかしこの問いは、古今東西100万回も繰り返されてきた問いなのに、未だに答えは見つかっていないとも言われています。作家の五木寛之さんは「人生の目的」という本の中で、人生の目的は、「自分の人生の目的をさがすことである」、と言っています。また、国民的映画「男はつらいよ」で、渥美清さん演じるフーテンの寅さんが、甥っ子である満男の「人間は何のために生きてんのかな」という問いかけに、「難しいこと聞くな、お前は・・・何と言うかな、あー生まれてきてよかった。そう思うことが何べんかあるだろう。人間そのために生きてんじゃねえのか」と答えています。「人は何のために生きるか」に対して、「生活をするためである」と答えた哲学者もいました。人は何のために生きるかの問いに対して、日常生活で言えば、お金を儲けて良い暮らしをするため、良い家庭を作るため、職業生活で言えば、仕事の成果を上げるためなどなど、答えと考えられるものはいくらかも挙げられることはできそうです。しかし、生きるということは、そう単純ではないかもしれません。定年退職をしたあとは、夢中になれる趣味を見つけ、それを生きがいにして生きればよいということもよく言われることですが、これも第三の意識とは少し違うように思います。人は、毎日生きることを通して、自分自身の存在を、意識的に、あるいは無意識的に確かめつつ生きていくものですので、日常生活や職業生活を離れて、自身の存在の意味を考える時間を持つことこそが、生きる目的なのではないかと考えるようになりました。

### 生きる目的と大学教育

毎日、卒論研究をするために研究室にやってくる4年生に対し、最初の日に研究テーマの説明をします。私は、その説明をするときに、通常、3つのレベル（上位、中位、下位）に分けて説明することになっています。それぞれの学生さんが携わっている研究（実験）の最も上位の目的は、人類の幸福や福祉のため

とか、人類に文化的遺産を残すためとか言えるかもしれません。しかし、この説明はいずれの研究にも当てはまる説明です。また、最も下位の目的は、今始めようとしている実験そのものの目的、すなわち、私が関係している応用微生物学の分野であれば、微生物を培養するための培地を作成するとか、微生物細胞から遺伝子DNAを分離するとかです。こうした実験の直接的な目的は、いずれの学生も容易に理解できるものですが、それは作業の目的とも言えるものです。中位の目的というのは、例えば、応用微生物学の分野であれば、社会の持続的発展とか、環境やエネルギー、あるいは食糧問題の解決とかと思いますが、就職面接などで学生さんに求められる説明は、この中位のレベルのものでしょう。しかし、大学を卒業したあと携わる仕事は、その分野の学者

にでもならない限り、卒業研究で行う実験と直接的に関係することはほとんどありません。従って、卒業研究の目的として重要なことは、卒業研究のテーマを題材にして論理的にものごとを考える訓練を自らに課することであるということも、いつも学生さんに言っています。

しかし、その背後には、当然ながら人は「何のために生きるか」というような問いがあるはずで、恥かしながら、これまで私自身がほとんど職業生活における意識の中でしか生きてこなかったこと、大学の教育が職業教育に偏ってしまっているように思われることなどを考えると、不遜にも、卒業研究を通して、「人間はどうして生きているのだろう」というようなことにも思いを馳せてもらえるような教育ができればと思っている今日この頃です。

